

深イ～話！

No.105

——「すべてを肯定して生きる」(島田妙子著)——

私の原点を探ると、四歳までさかのぼります。その年に両親が離婚し、私と二人の兄(大兄、小兄)は児童養護施設に預けられることになりました。父は一緒に暮らす方法をずっと模索してくれたようで、私が七歳の時に再婚すると、家族揃って暮らせるようになりました。

当時、継母は二十二歳。最初は優しい人でしたが、お腹に父との子供を身ごもると次第に余裕を失い、自分が産んだわけでもなく、年子で手がかかる年齢の私たちの世話が億劫になったのでしょう。

その年の冬、溜まりに溜まったストレスが爆発しました。突然、継母が靴ペラで私の二の腕を叩いたのです。驚きのあまり声も出ず、叩かれたところをさすると、さする指をさらに力いっぱい叩かれ、出血しました。理由がわからない上に、継母の顔つきがいつもと違うことがただ恐ろしく、私は涙が止まりませんでした。

その日から、継母は毎日私たちを叩くようになりました。そして必ず、「これは躰やで」と言い続けるようになりました。

食器を洗っていたら後ろから蹴飛ばされたり、真冬でも自分たちの洗濯物を洗濯板で洗うのは当たり前。一晩中寝かせてもらえない、食事を抜かれるというのはましなほうで、たばこの火やアイロンの熱で何度も全身をあぶられました。

父と継母は絶えず喧嘩するようになり、父の顔は次第に鬼の形相に変わって酒量も増えました。そして継母からの「躰」が始まった一か月後、父からも暴力を受けるようになったのです。包丁を握った父に追いかけられ命からがら逃げたこと、湯船に沈められて死にかけたこともあります。

それでも父の優しくった頃を知っているので、いつか優しい父に戻ってくれるのではないかという願いと希望だけで耐え抜きました。

一軒家のベランダに裸で放り出されたり、常に大きな物音がしていたので、周囲の家には気づかれています。しかし、当時はまだ虐待という言葉すらなく、通報する習慣もありませんでした。

そんな辛い日々の中で唯一支えとなったのは、小兄でした。一人で虐待を受けていたら、とっくに死んでいたと思います。

何度も家出しましたし、中学一年の時には自殺未遂もしました。でもそれは、辛いから死ぬのではありません。私が死んだら親はやっと気づくのではないか。見せしめのために遺書を書いて死んでやろう。そういう気持ちです。その頃の状況は、三人で親を殺すか、自分たちが死ぬか、生き地獄の日々でした。

転機が訪れたのは中学二年生の時。マツハ先生というあだ名の二十七歳の若い女性の先生が担任になり、私のアザや傷を心配し、常に注意して見てくださるようになったのです。

「何かあったら電話してくるんやで」と、十円玉をくれるなど、見守ってくれました。

そんな五月のある日、事件は起こりました。泥酔し帰宅した父に、私は初めて首を絞められ、意識を失いかけました。大兄が父を突き飛ばして助けてくれたのですが、それにカチンときた父は、そばにあったガラスの灰皿を持って大兄の頭を思い切り殴ったのです。

大兄の頭からは血があふれ出ていました。暴力が表沙汰になることを恐れた父は、なんと自宅にあった普通の針と木綿糸で、麻酔もなしに大兄の頭を縫い始めたのです。

父は完全に理性を失っていました。

その日の晩、大兄は父と継母の寝室の前で金属バットを握りしめ、震えながら泣いていました。大兄はもう中学を卒業していたので、次の日家を出ると、二度と戻ってくることはありませんでした。

私はマツハ先生に電話し、打ち明けました。

学校に呼び出された父と継母は言い訳するばかり。するとマツハ先生は「子どもに暴力振るっているやろ！言い訳は絶対に許さない。親子でもやったらあかんもんはあかんのや！」と。

生きるか死ぬかの状況の中で、マツハ先生と出逢えたことは本当に奇蹟でした。

その後、私は児童養護施設に保護されました。中学二年の五月から卒業までの二年間、そこで過ごせたことは本当にありがたいことでした。ご飯が三食食べられる、布団で寝られる、何より暴力を振るわれない。普通の生活を送ることができる幸せをかみしめました。

父と継母は離婚し、その一年半後、父はお酒と強力なパイプ洗浄剤を一気に飲み、自殺を図りました。がりがりにやせ細り、四十二歳で最期を迎えました。

継母は実の息子と二人で暮らしていましたが、息子が結婚し家を出ると、継母の生活は再び荒れ、お酒やパチンコに夢中になり、私や義弟に何度もお金を無心するようになったのです。

結局、継母は五十二歳で孤独死していました。

私は中学を卒業すると、寮制の食品工場で雇っていただき、二十二歳で結婚し、四年間で三人の子どもを授かりました。一番下の長男はアスペルガー症候群という自閉症をかかえています。いったんパニックになると手がつけられず、落ち着くまでに2時間はかかるような状態が続きました。

お舅は八十七歳で重度のアルツハイマー症。日に何度も家を抜け出しては迷子になり、迎えに行かなければなりません。八十歳のお姑は腰を悪くして車イス生活。手術の後遺症で自分で排尿できないので、私が毎回導尿しなければなりません。ストレスはたまるばかりで、私の中で何かが壊れました。

泣き叫ぶ息子の鼻と口を押えてしまったのです。

ハッと我に返り、すぐに手を離しましたが、もう耐えられませんでした。泣けるだけ泣きつくしました。

そしてテーブルの下で震えていた息子を抱きかかえ、「ごめんね」と謝りました。その時に学びました。

人は誰でも感情のコントロールが制御不能になり、加害者になる可能性を持っているということ。

そこで本当に大事なものは、心から謝罪して許してもらうことです。

人間ですからイライラすることもあります。しんどくなる時もあります。人に当たりたくなってしまうこともあるでしょう。そんな時、これは神様が自分に何かを気づかせるために用意した出来事だと思い、自分の感情を受け入れることが大事なのです。

現在、児童虐待防止活動のほかにも、アンガーマネジメントのコンサルタントも務めております。

怒りが沸点に達すると、脳からアドレナリンが大量に分泌され暴力的になります。その時に深呼吸をし、たった6秒間待つだけで、アドレナリン分泌が収まり冷静さを取り戻せるのです。（「六秒ルール」といいます）こうした誰でも簡単にできる知恵を多くの人に広めることで、被害者を救うだけでなく、加害者となって苦しんでいる人も救いたいと思い活動しています。

過去に起こった出来事は変えられませんが、自分がいまこの活動をするために起こったと思うと、辛い過去も財産になるでしょう。虐待を生き抜いた私だから伝えられることを、全国を回ってお話しています。

過去や現在にどんなに辛いことがあったとしても、未来には素晴らしい世界が広がっていることを、一人でも多くの方にお伝えしたい。

